

論文の内容の要旨

論文題目 アメリカ社会における「ファット／肥満」概念構築の
民族誌：リスクと社会運動からの人類学的探究

氏 名 碓 陽子

本論文の目的は、現代アメリカ社会の肥満問題にかかわる諸活動を、リスクと社会運動という観点から、「ファット／肥満」概念の構築と人間存在の相互作用の様態として記述、検討することである。「肥満」や「ファット」といわれる太った身体は、これまで、文化人類学だけでなく社会学やフェミニズムなどの分野においてさえ、中心的な研究の対象となつてこなかった。ところが、1980年代以降、アメリカでは肥満者の激増が社会的に問題になり、太っていることを病気のリスクとして予防改善されるべき状態だとみなす傾向が強まるにつれて、肥満問題が、貧困の問題、ジェンダー差別や人種差別など、さまざまな問題と絡み合っていることが明らかになってきた。つまり、体重や健康の自己管理が市民に課せられた義務だとする見方が強まる一方で、そのことから生じるさらなる問題や反発がますます先鋭化してきているといえる。

本論文では、こうした状況を、肥満のリスク化によって、「肥満」と分類される人びとの行動や経験の理解の仕方が変化したり、新しく形成されたりしている状況だと捉え、これを質的な記述によって綿密に明らかにした。現代社会のこうした複雑な状況を記述するプロセスを通じて、人類学において従来から重要なテーマである不確実性の制御、社会関係のあり方、文化相対主義の議論について一つの視座を提示することを試みた。さらに、本論文は、太った身体を単に改善されるべき状態であるとみなす昨今の状況を相対化し、現代社会における新しい多様性のあり方を示したという点で重要な意味を持つ。

本論文のもとになるフィールドワーク調査は、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフ

ランシスコ・ベイエリア地区を中心に、2006年6月から2009年4月まで集中的に行われた。筆者はその後も2012年まで断続的に現地を訪れ、追加調査と資料収集を行っている。調査は大きく二つに分けられる。一つめの調査は、低所得者層向けの食糧支援プログラムでの参与観察、および、公衆衛生の現場で働く人々への聞き取り調査を行った。二つめの調査は、1969年にアメリカで誕生した、太った人びとの市民権の承認を求める社会運動であるファット・アクセプタンス運動を対象にした。具体的には、ファット・アクセプタンス運動の中心的な団体である全米ファット・アクセプタンス協会（National Association to Advance Fat Acceptance）とその参加者に対する聞き取り調査を行った。

本論文の構成は、序章と終章、および二部構成の6章からなる。序章では、以下の二つの大きな分析枠組みを設定し、それらについての先行研究の整理を行った。すなわち、(1) 概念構築と人間存在の相互作用という視座を得るための文化人類学や社会学の先行研究の批判的整理、(2) リスクと社会運動についての文化人類学を中心とした先行研究の整理を行った。まず(1)については、これまで、人類学では異文化の太った身体を文化的多様性の題材として肯定的に描いてきたこと、また、社会学やフェミニズムでは、社会構築主義的な見方を通じて、肥満問題や瘦身文化の自明性を相対化しようとしてきたことを確認した。これらの研究には、過度な瘦身願望や摂食障害を生み出している西欧社会の「異常性」を批判的に照射する効果があった。しかしながら、その一方で、こうした研究は、文化社会と自然を対立的な二つの領域とみなし、前者を担当する文化人類学や社会学は、極端な場合には、現象の事実や意味は全て構築されているとする立場を取ってきた。そのため、本来、観察され、記述・分析されるべき人びとの実際の活動や経験が除外されてしまいがちであった。このような行き詰まりに対し、本論は、イアン・ハッキングの議論にもとづき、概念の意味も、概念によって指示される人間の存在自体も動的に変化していくと捉え、先行研究の行き詰まりを乗り越えることを試みた。

次に(2)について、まず、「リスク社会」という時代診断について整理した。本論文では、「リスク社会」を、科学技術の進歩がもたらす「未来の操作可能性」と「未来の非決定性」という矛盾に、人びとが同時に直面せねばならない時代として特徴付けられることを確認した。そして、こうした事態が「リスク社会」のさまざまな連帯や社会運動を生み出していると考えた。さらに、ファット・アクセプタンス運動を分析するための準備として、社会運動についての先行研究の整理を①新しい社会運動やアイデンティティ・ポリティクス、②「リスク社会」の生の不安に対処するために連帯する人びとによる社会運動という二つの点から行った。まず①では、ファット・アクセプタンス運動は、アイデンティティ・ポリティクスの特徴と重なる部分も多い。しかし、体重はコントロール可能なものとして捉えられている点で、ファット・カテゴリーは既存のマイノリティ・カテゴリーとは大きく異なる特色を持つこと、現代アメリカ社会においてファットという言葉は物理的な体型の大きさによってメンバーを峻別する類のカテゴリーではないこと、さらに、こうした特性からファットが指し示す対象や意味内容は不明瞭であることを指摘した。そのため、実

際の運動の場では、ファット・カテゴリーによって誰が動員されるのか、ファット・アクセプタンス運動における個人的集合的アイデンティティはいかなるものであるのか、運動を通して形成される共同性はいかなる特質を持つのか、などの問いが後章で検討されるべき課題であることを確認した。さらに②では、ファット・アクセプタンス運動を、「リスク社会」の生の不安に連帯して立ち向かう人びとによる社会運動として位置づけ、それについての研究整理を行うことによって、アイデンティティ・ポリティクスとして理解しきれない部分を補おうと試みた。

第1章と第2章からなる第一部「肥満・リスク・制度」では、肥満のリスク化をめぐる公衆衛生による予防介入政策を分析の対象とした。具体的には、第1章では、確率統計学の発達によって肥満がリスクとして可視化される歴史を概観した上で、社会的リスクが、個人が引き受けるべきリスクとして配分されるプロセスを検討した。第2章では、肥満の貧困化をめぐる言説、政府の支援の歴史と現状、現場の実践を多角的に捉えることによって、貧困者層の肥満問題において、リスクの引き受け手が不在である状況を描き出した。

第3章から第6章からなる第二部「ファット・社会運動・科学」では、「肥満」カテゴリーとして分類される人びとが、「ファット」として自らを認識し、既存の科学的知の体系を作り変えていこうとする有様を描いた。特に、第3章から第5章までは、ファット・アクセプタンス運動参加者たちが、他のマイノリティ運動や他者との関係を通して、「ファット」としての自己規定に苦闘する様子が描かれる。まず、第3章では、ファット・アクセプタンス運動が、1970年代にフェミニズムと1980年代から90年代には障害者運動との連携を求めた歴史に注目しながら、マイノリティ・カテゴリーとしての「ファット」が、「女」や「障害」とどのように異なるかを明らかにした。第4章では、ファット・アクセプタンス運動の参加者は多くが（白人）女性であるという事実に着目し、ファットであることは同時に女でもあるという事態が運動参加者にどのような軋轢をもたらすのかについて論じた。第5章では、ファットとしての自己規定に困難を抱えながらも、運動参加者はなぜ「ファット」を指向／志向し、集うのかという問いを立て、集団化の根拠に、従来、社会運動論で論じられてきた集合的アイデンティティを前提とするのではなく、運動の場に生成する人びとを結びつけるような情動的関係性に注目した。第6章は、ファット・アクセプタンス運動を、「リスク社会」に特徴的な不確実性に直面する人びとの生の技法として理解することを目指した。すなわち、序章と第一部で描写説明した「リスク社会」がもたらす矛盾に対し、ファット・アクセプタンス運動の参加者が異議申し立てを行い対抗する様態を、ネルソン・グッドマンの世界制作論に依拠しながら描写した。

以上の議論を踏まえ、終章では、本論文で明らかにされたことを結論として提示した。特に重要な点は、一つめに、「リスク社会」に生じている不確実性と決定論の齟齬についてである。「リスク社会」では、リスクに対する決定を責任に引きつけて考えるため、未来に対する不利益がある決定者に帰責される際には、そこに決定論的な思考が持ち込まれる。そのため、リスクの決定者とみなされた者は決定論と不確実性のあいだの齟齬の克服に努

めなければならない。ファット・アクセプタンス運動は、新たな知の体系を再構築することによって、その齟齬を克服しようとする一つの運動であると言える。二つめに、ファット・アクセプタンス運動は、アイデンティティを一つのカテゴリーに還元するアイデンティティ・ポリティクスとして展開しづらい面を持つということである。ファット・カテゴリーは複数の差異カテゴリーを内包しているため、どのような他者を措定し、どのようにファットとしての自己を形成していくかにおいて困難を抱える。三つめに、以上から明らかになるのは、「ファット／肥満」をめぐる概念と人間存在のあり方は、特定の人びとに関する問題であると同時に、皆に関する問題でもあるという点だ。そのため、人間の多様性の形態を考えるために、これからもファット・アクセプタンス運動の行方を注視していく必要がある。